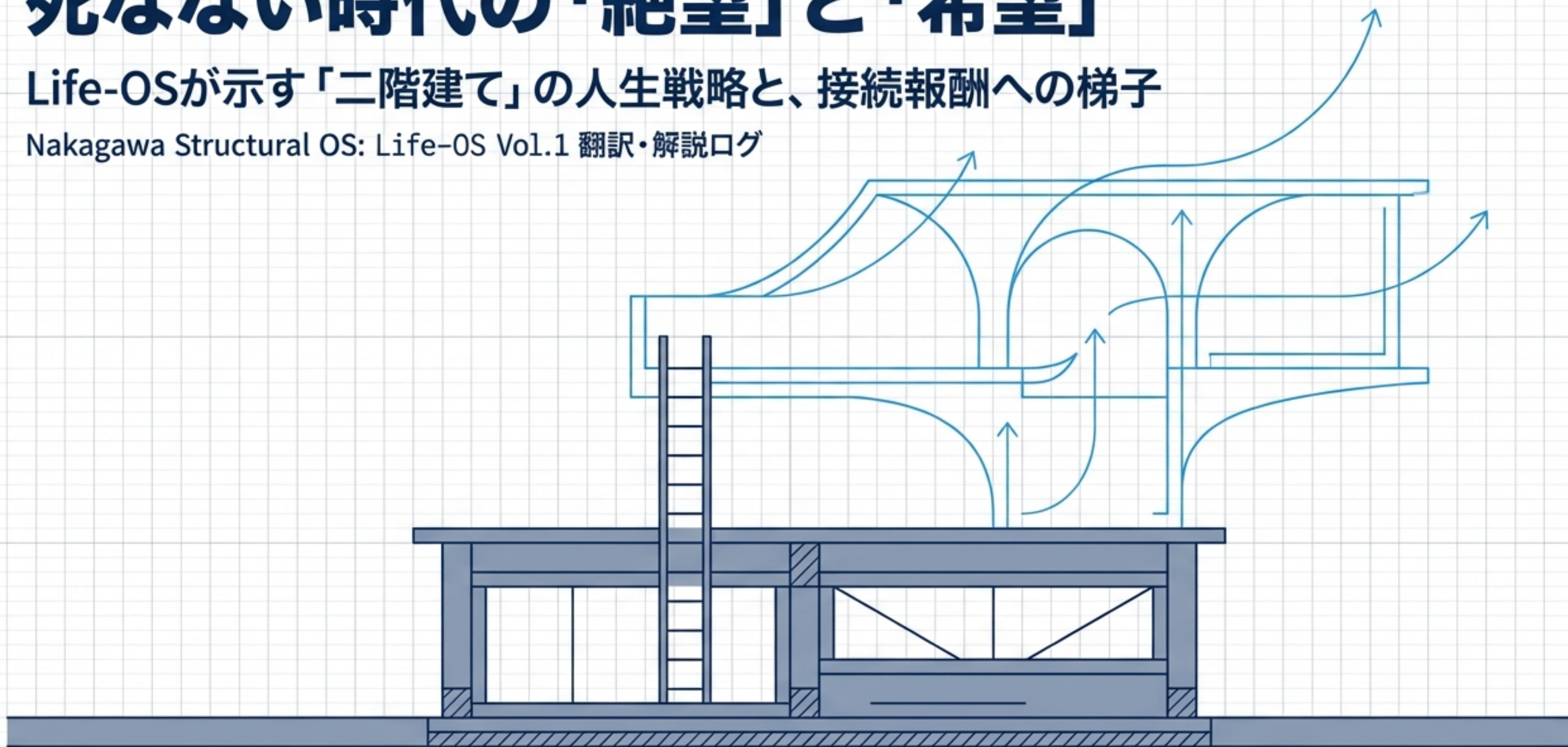


# 死なない時代の「絶望」と「希望」

Life-OSが示す「二階建て」の人生戦略と、接続報酬への梯子

Nakagawa Structural OS: Life-OS Vol.1 翻訳・解説ログ



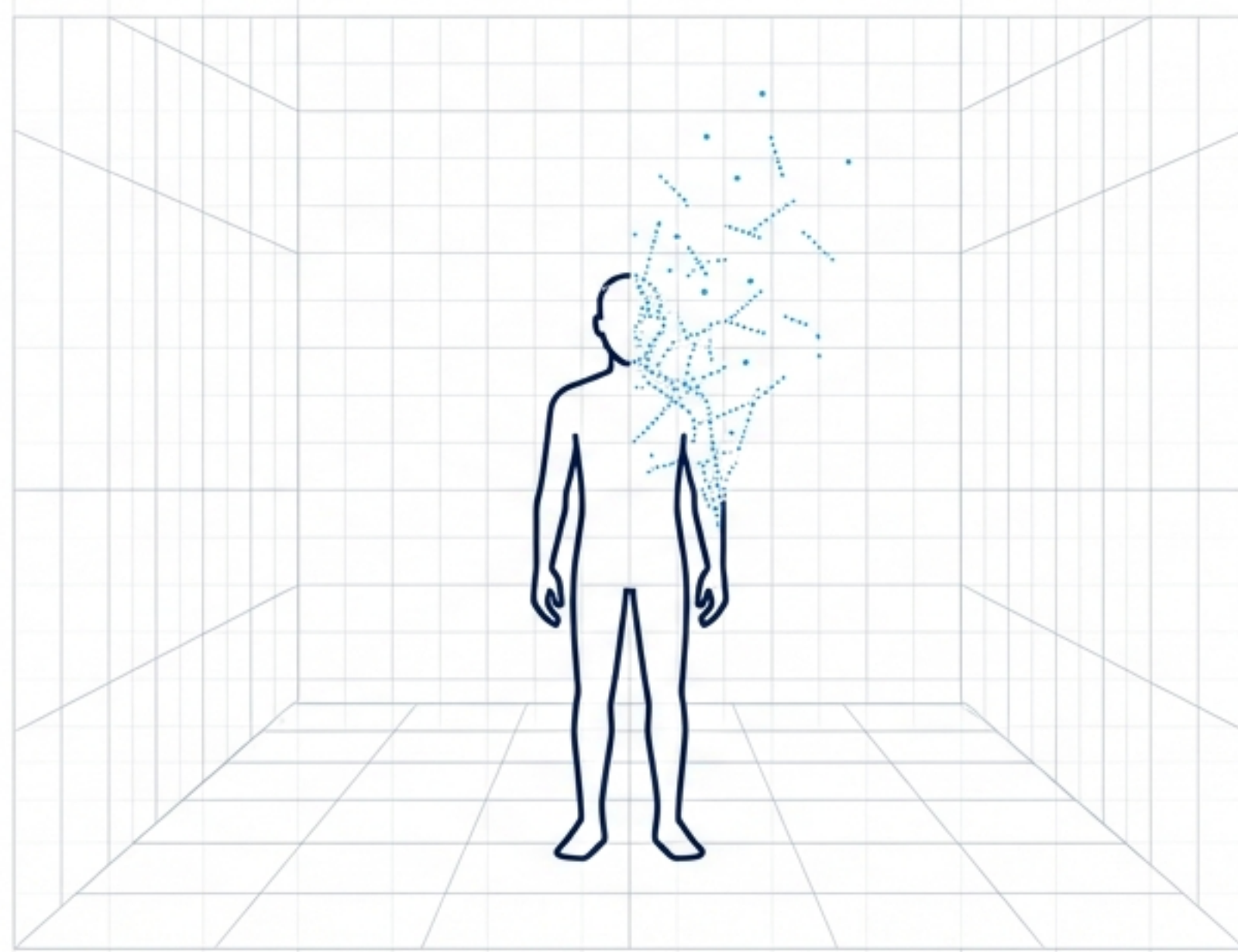
# 生存権は、すでに「物理的な床」として敷かれつつある

- 現代文明の非線形な生産構造により、「働かなくても死なない」は理念ではなく工学的な前提条件となった。
- これは革命ではなく、現実を追いついたインフラの構造変化である。

Survival Baseline  
生存基盤

# 恐怖が消滅した世界に訪れる「退屈という死」

生きるために働く必要がなくなったとき、人は「何もしなくていい絶望（虚無）」に直面する。  
人間は本質的に「構造との接続」を求める生物であり、接続なき安住は緩慢な自己破壊へと向かう。

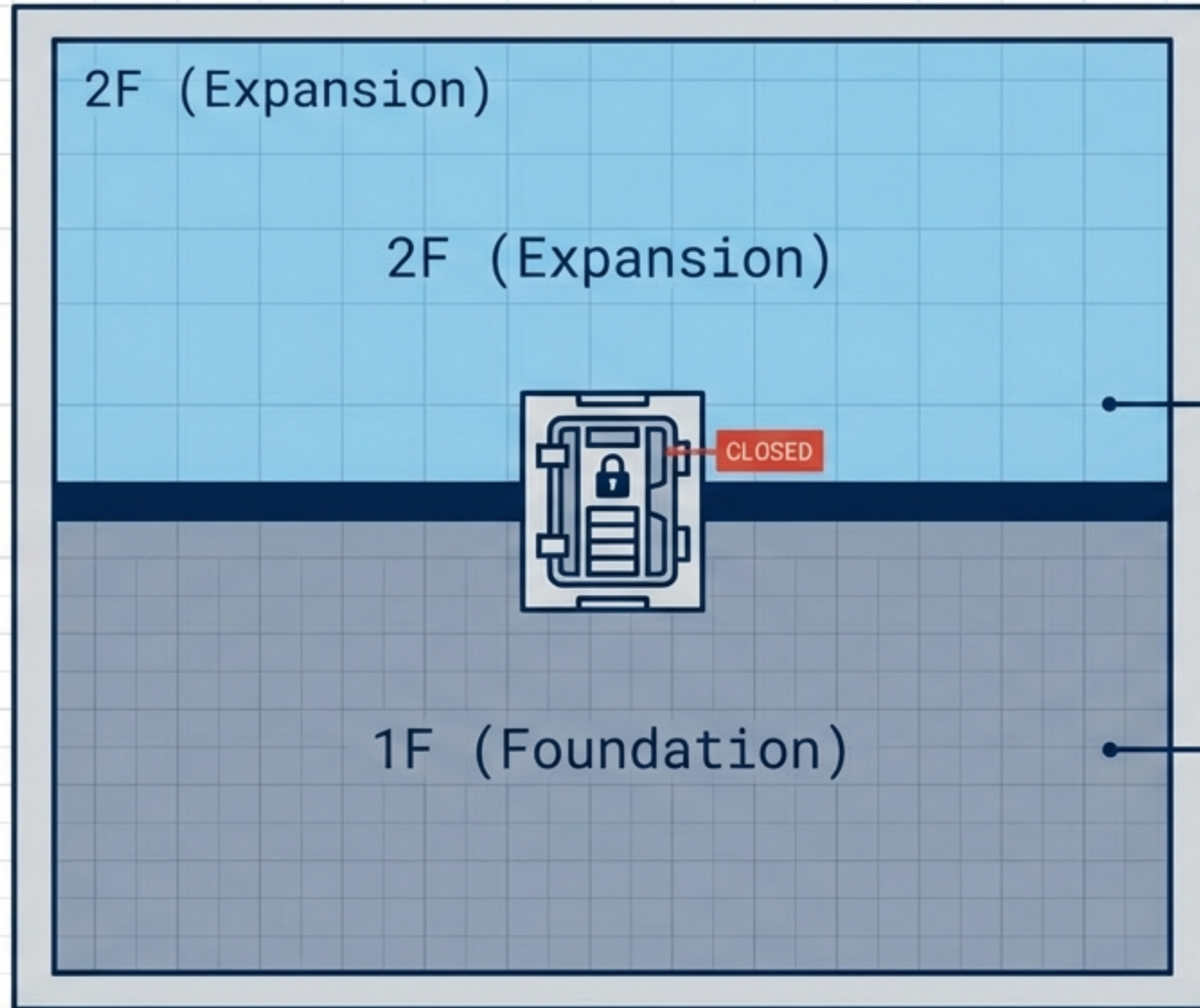


# 旧文明OSの構造的欠陥：「生存」と「拡張」の混線



- 従来の人生観は、生きること・成功・幸福がすべて「同一平面」にあった。
- 成果を出せない者は生存の正当性すら疑われる。人生は常に「足元が抜ける恐怖」を抱えた不安定なゲームであった。

# Life-OSのアーキテクチャ：「二階建て」の人生設計

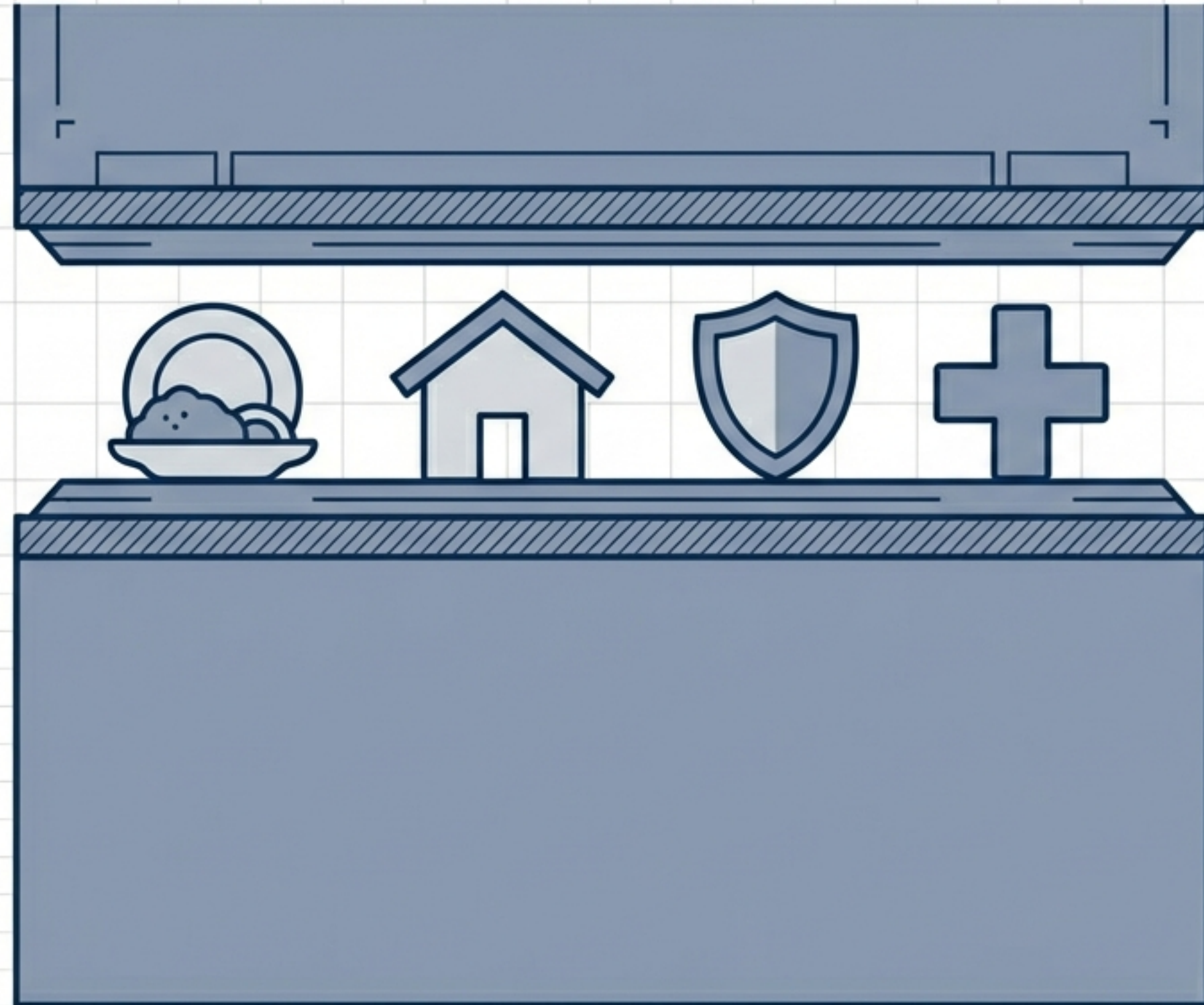


生存基盤と上位構造を物理的に切り離す。

2階：接続によってのみ開かれる「自由と裁量」の層  
(自動では開かない)

1階：無条件で生存が保証される層 (絶対に落ちない)

# 1階 (Foundation) : 退屈だが、絶対に落ちない床



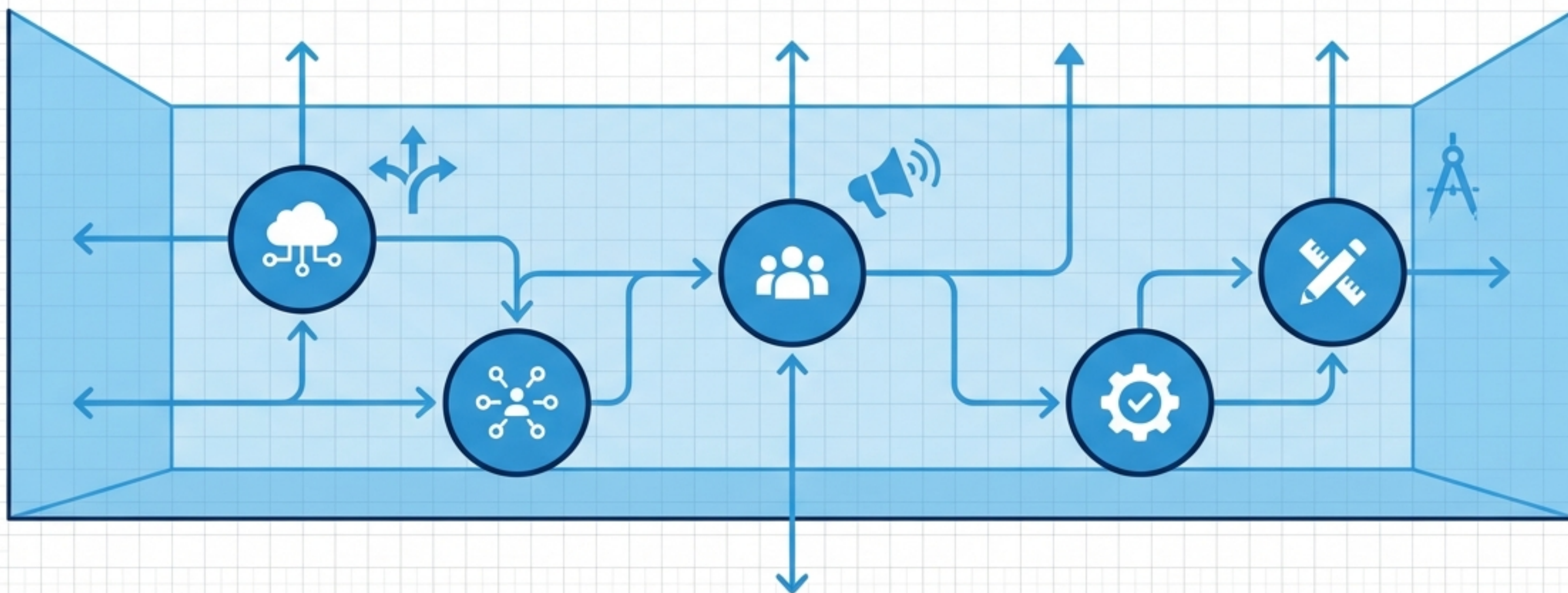
努力や成果の対価ではなく、無条件で与えられる生存の権利。

しかし、ここは「スタート地点」に過ぎない。1階にいる限り、人は死なないが、自由も拡張も一切発生しない構造になっている。

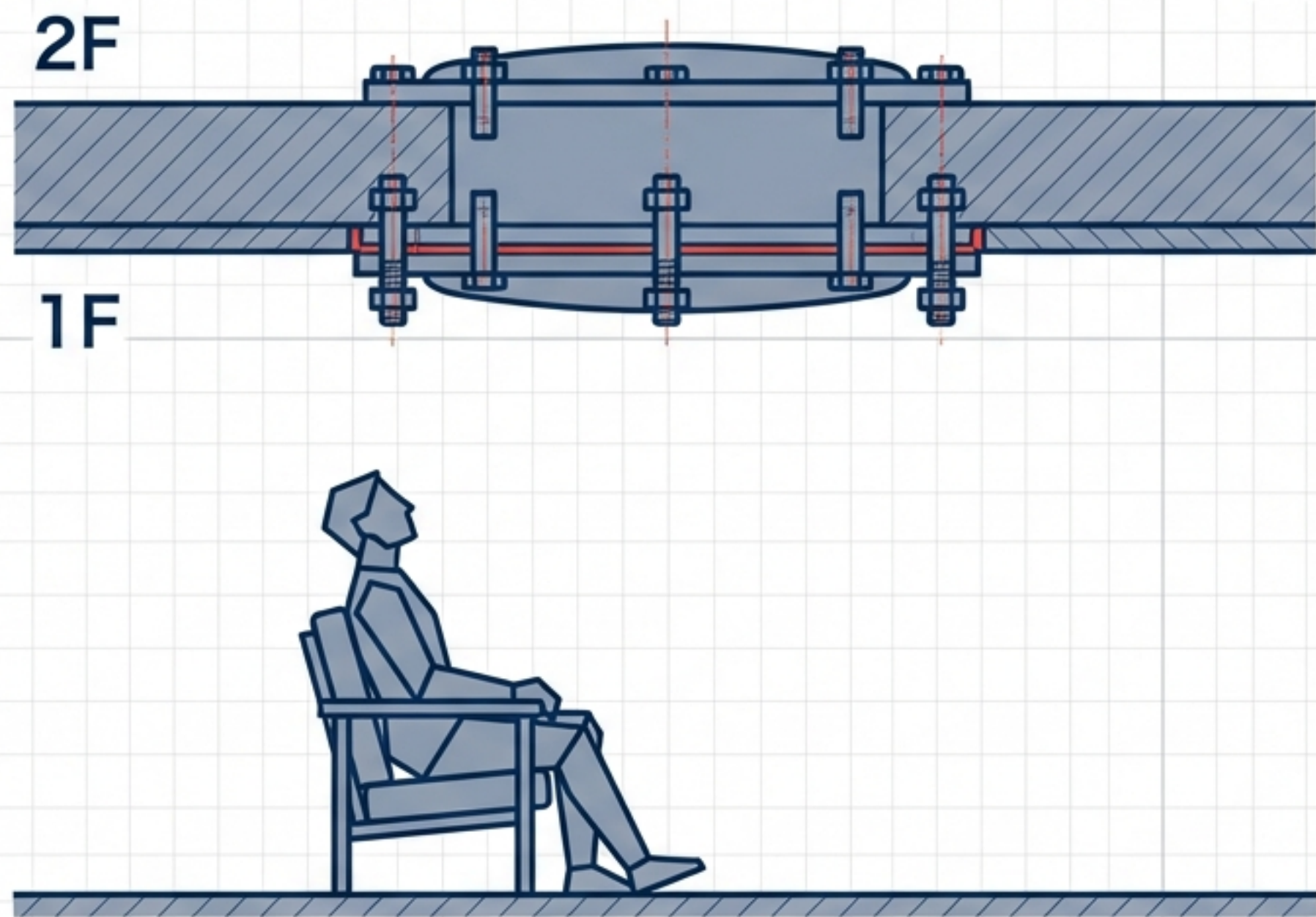
## 2階 (Expansion) : 接続によってのみ開く「拡張層」

移動の自由、選択肢の増加、創造の裁量。

これらは与えられる権利ではない。社会や構造と自らを接続し、価値の流れに参加した時にのみ発生する「接続報酬」である。



# 1階と2階を隔てる「壁」は待っていても開かない

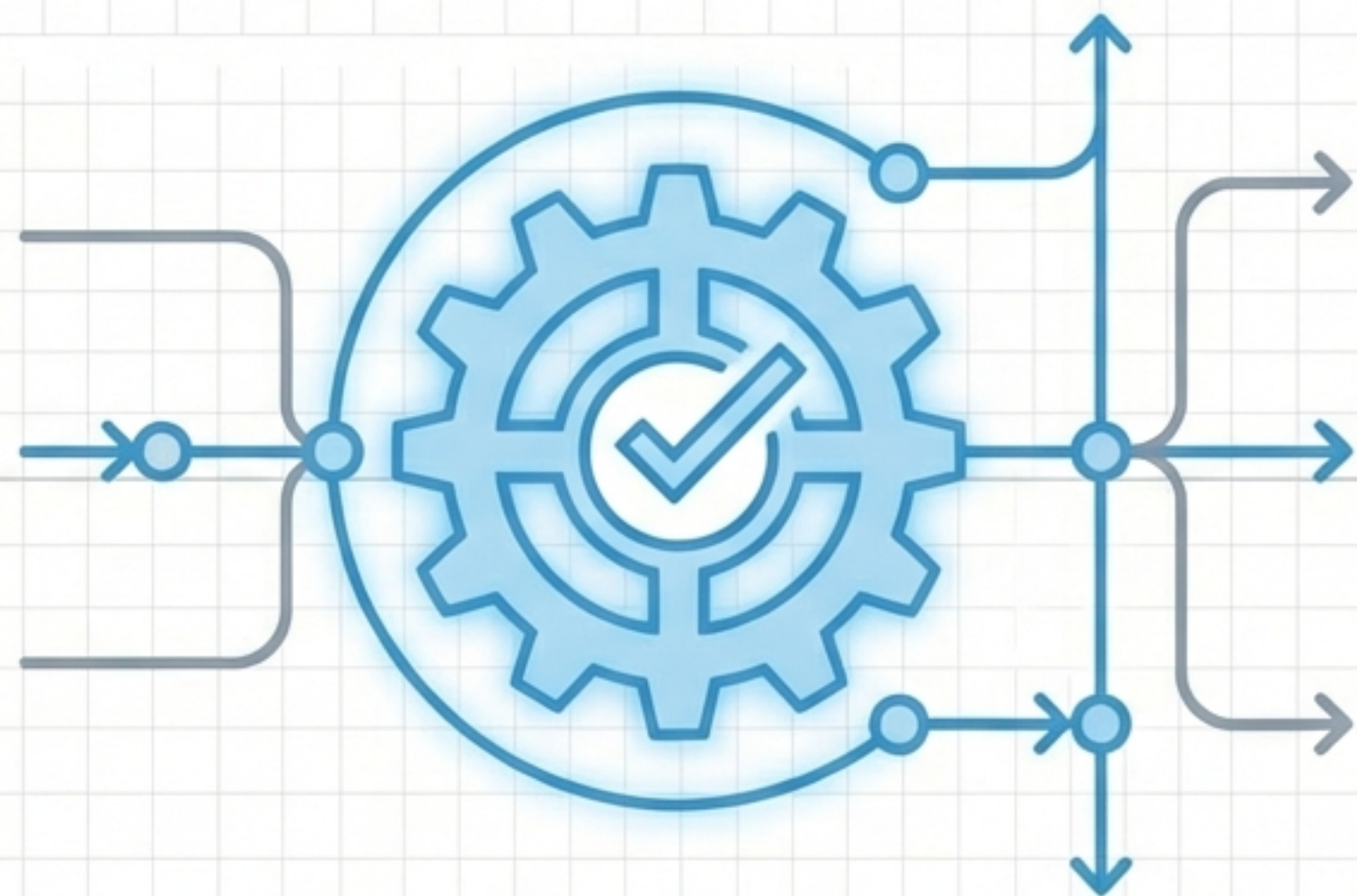


- 1階に留まることは完全に自由である。
- しかし、「いつか自然に2階に上がる」という幻想は捨てるべきだ。善意や待機だけでは、壁は決して開かない。

# 「努力」の廃棄：恐怖駆動から構造整合へ



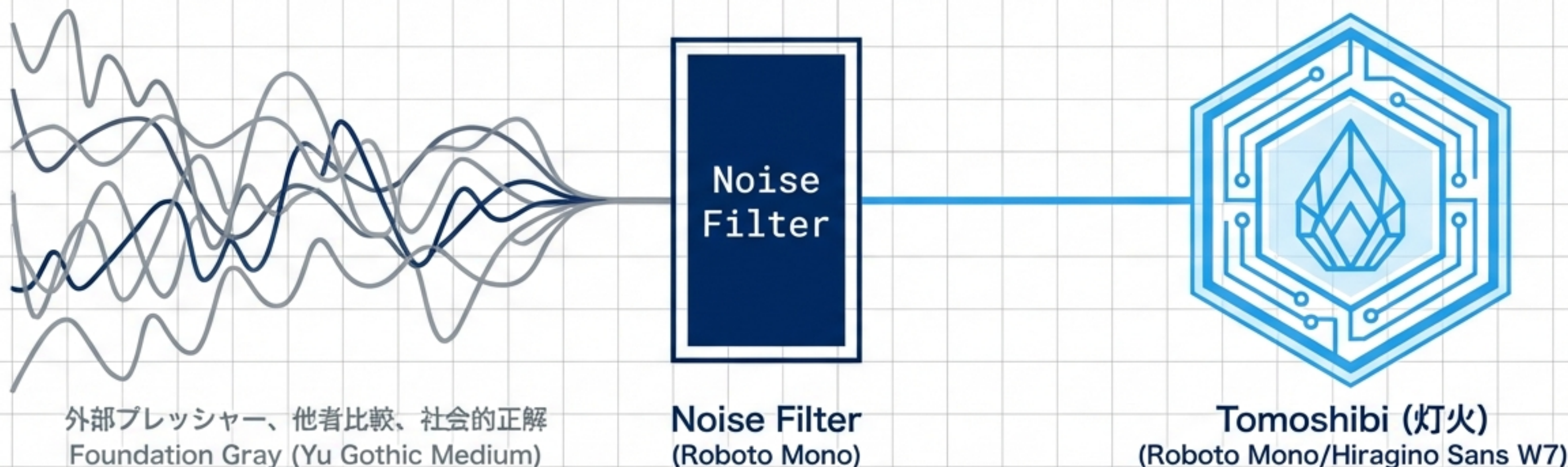
恐怖駆動の努力



構造との整合

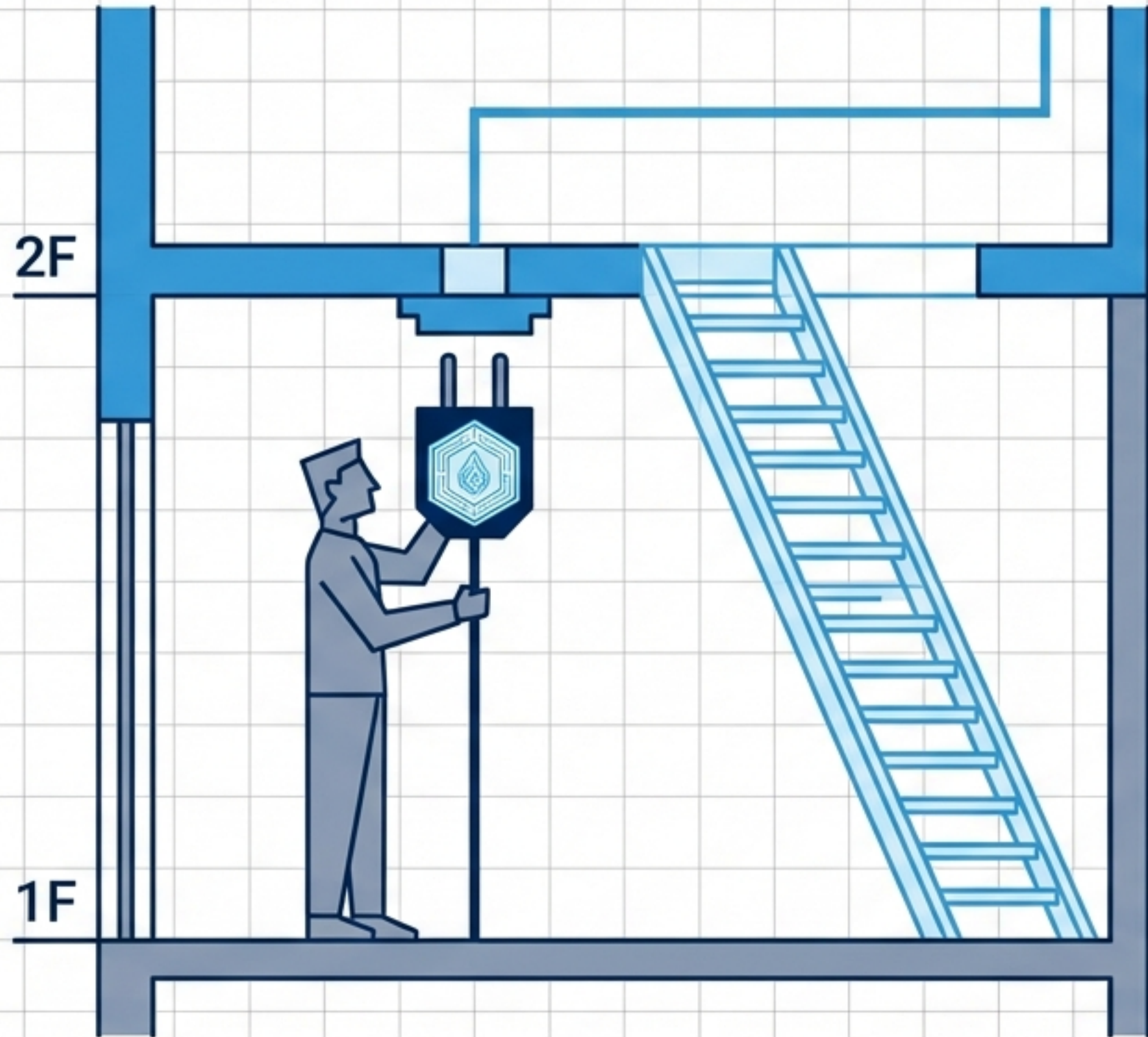
汗、忍耐、根性は旧文明における「恐怖を燃料にした燃焼の痕跡」に過ぎない。  
壁を越える鍵は努力量ではない。自らの行為を、どの構造の文脈に差し出しているかという「方向」である。

# 新たな動力源「灯火 (Tomoshibi)」の精錬



外部エンジン（恐怖・承認）が停止した世界で唯一使える内燃機関。  
才能や崇高な使命ではない。ノイズを除去した後にどうしても残ってしまう「違和感」や  
「構造的偏愛」こそが、安定した熱源となる。

# 努力ではなく「アライメント（位置取り）」で登る



汗をかくのではなく、  
正しい位置に自分を噛み合わせる。  
自分の内なる灯火を、他者や社会が  
刺せる「プラグ」の形に変換し、  
社会の構造へ接続した時、  
壁は初めて階段へと変わる。

## 構造法則としての「接続報酬 (S = C × 1.0)」

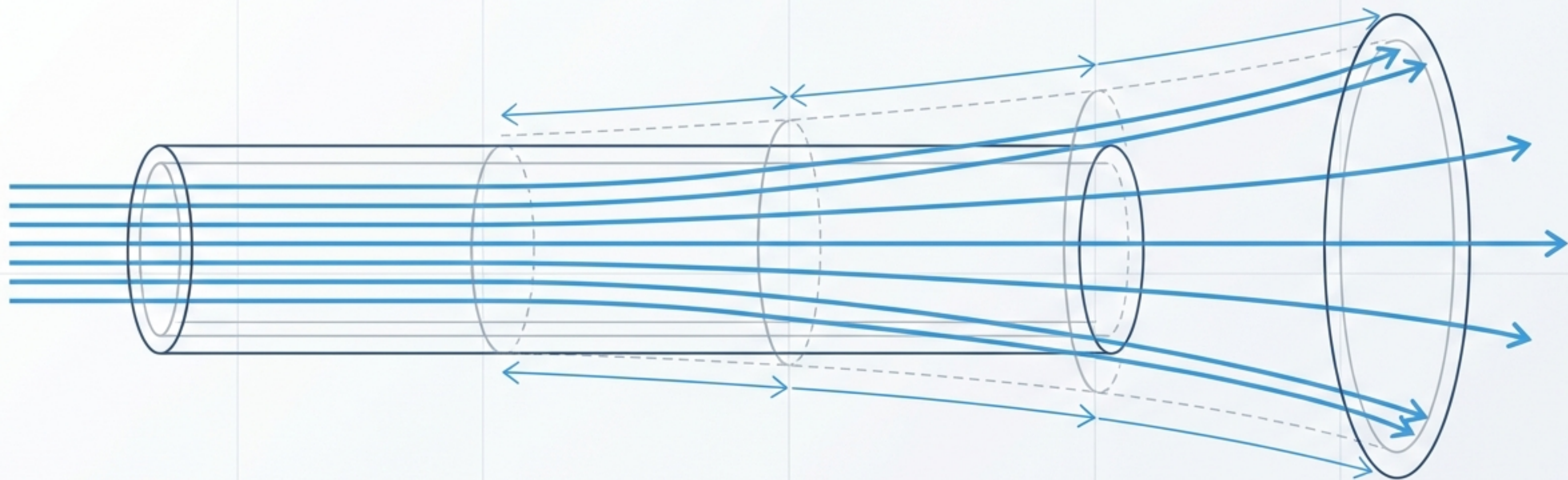
$$S = C \times 1.0$$



構造と整合した時、個人の行為は純度100%の貢献 (C) として認識される。

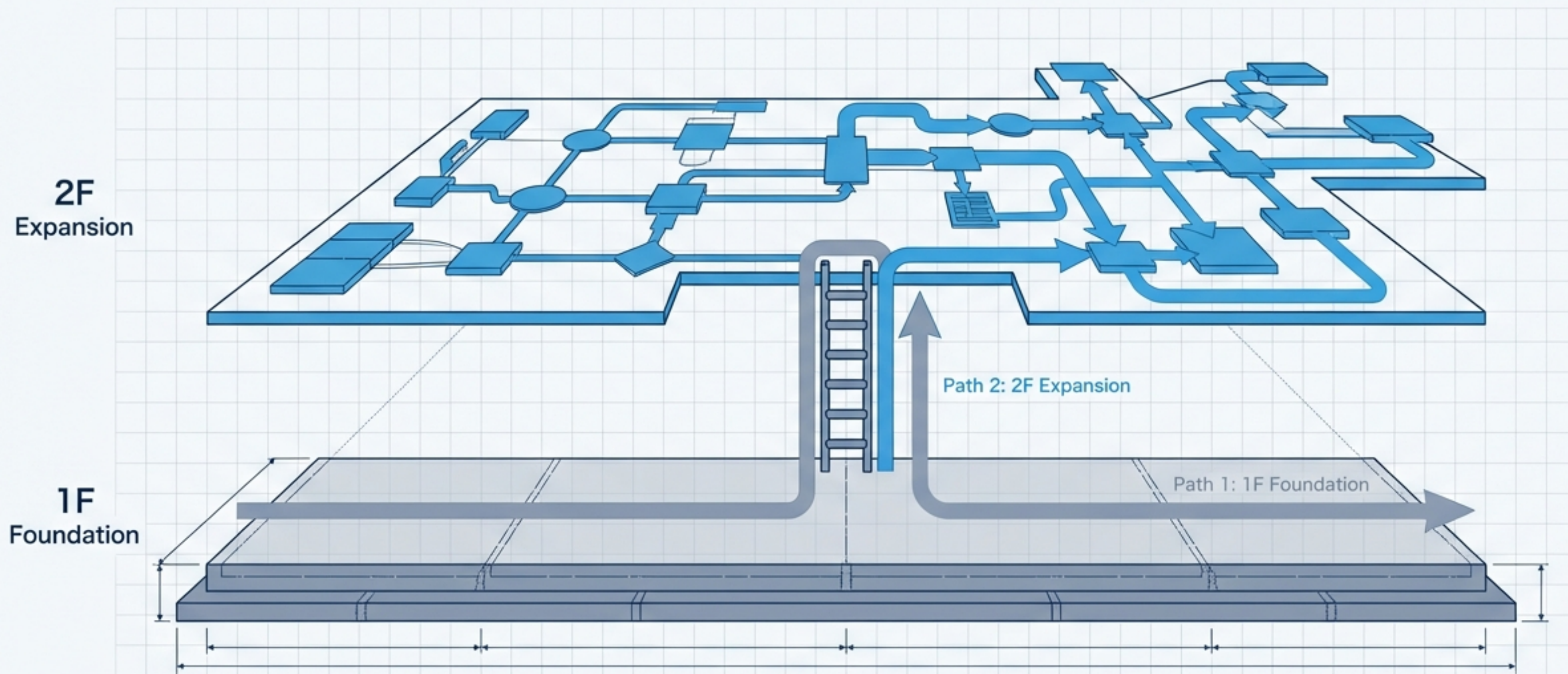
それに対する対価 (S) は、賞金や称号ではなく「世界との交換可能性 (自由度) の拡張」として自動的に還流する。

## 到達像：価値を所有せず「循環する管」になる



何かを所有し、溜め込む者は構造の中で詰まりを起こす。  
理想の形態は、自分の中で価値を滞留させず、必要な方向へ通し続ける「管」になること。  
これが恐怖から解放された文明における「自由」の定義である。

# 構造は、すべての選択を許容する



1階の安全な床に留まるか、自らを接続して2階の拡張へと向かうか。どちらも等しく自由である。  
問われているのはただ一つ、「あなたは、どこへ流れるか」。